

# 小・中学生の服装に対する意識と行動

—— 学年・男女・通学服種別差異 ——

鮎田 崎子・多田 和美

(被服学研究室)

(平成11年5月20日受理)

## The Awareness Behavior of Primary School Children and Junior High School Students toward Their Clothes —— Based on Difference in School Grade, Sex and Usual School Wear ——

Sakiko FUNADA, Kazumi TADA

### I 緒 論

人は、毎日被服を着て生活をしている。被服を着ることによって、最も身近な環境を形成し、自然環境や社会環境、文化環境への適応を図っている。現代社会においては、被服を着る目的は、皮膚を保護し、体温調節するなど健康を維持するためのみならず、社会や文化環境への適応のための意味が強くなっている。また、どのような被服を着るかについては、居住する地域や文化環境の影響を受け、被服に対する個人の価値観の違いが反映する。何を目指して服を着るかという被服価値として、クリークモアは8つのタイプを提案している<sup>1)</sup>。それは、経済的価値(服に関する儉約・質素・実用・耐久などを重視)、身体機能的(安全・保護・清潔・着心地などを重視)、理論的(服に関する知識やその体系化)、審美的(美の願望と追求)、探求的(変化・冒険・自由を重視)、宗教的(服に関する道徳表現の強調)、政略的(服を通し権力・地位・名誉を重視)、対人調和的(他者の服装に対する関心と同調)被服価値である。どの価値をどの程度重視するかは個人によって違い、多くの人々は、価値相互間に何らかのウェイトづけをおこなっている。よって、個人の服装は、着装者がどのような価値を重視して生活しているかの表れであり、その人の内面性を示すものといえる。

年齢的には、どの年代においても被服とのかかわりは大きい。小・中学生時代は、身長や体重をはじめ、身体の諸器官が著しく発達し、活動的な時期である。精神面においては、自我が芽生え、確立し、多くのメッセージを発すると共に吸収する時期でもある。

最近の社会状況は、歌手や芸能人の服装がテレビや雑誌などを通して伝達され、若者は直ち

に採用し、社会現象になっているものもある。また、個性化の傾向が高まり、教育現場においても、個性尊重の授業形態を重んじており、学校生活も変動している。

1日の大半を学校で過ごす小・中学生にとって通学服は、衣生活の重要な部分を占める。通学服は、制服や標準服、自由服および、それらの併用など学校によって様々な形態がとられている。公立中学校を中心にした全国的な調査<sup>2)</sup>によると、中学校では標準服(制服)採用が多い中、完全に自由服になっている学校は35校であり、北海道(7校)や東京都(9校)に比較的多い。土曜日のみ自由服の学校は9校である。中学校の標準服(制服)をモデルチェンジしようとする学校は、平成元年に43校であったが、平成9年には104校になっており、全国的に増加傾向にある。

愛媛県においては、平成2年に実施した通学服調査結果<sup>3)</sup>によると、小学校は、標準服・制服の学校が65.5%、自由服が30.8%、併用が3.7%であり、中学校においては、制服・標準服が99%であり、月1回、土曜日に私服登校を実施している標準服と自由服の併用型が1校存在する。通学服を自由に行っている中学校は皆無である。通学服のこのような状況は、児童・生徒の衣生活の社会的環境の1つといえる。

通学服の中には自由服のほか制服、標準服の呼称がある。広辞苑<sup>4)</sup>を参考に解説すれば、制服とは学校集団に属する者が着るように定められた服装であり、標準服はそのよりどころとするめあての服装ということになる。校則等による規制の程度に大きな違いがあると思われるが、本報では、学校側が通学服を決めていることにおいて特にことわらない場合は制服のなかに標準服もふくめている。

快適で健康な衣生活は、衣料が充足され衛生的・実用的に着用されるのみならず、衣服を着る心の意識も満たされていることが大切であると考え。先に筆者は、被服の着用に関する意識と行動の調査研究<sup>5) 6)</sup>から、小学生における着装の楽しさは着装する多様な服種やいろいろな着装体験を経て深まり、衣生活行動の自立や実践能力の向上にも寄与するものであることを明らかにした。また、中学生については、被服の購入・着装・手入れ・廃棄という一連の被服行動から服装に対する意識と行動を調査研究している<sup>7)</sup>。着装意識が積極的かどうか、制服に対して肯定的か否定的か、被服に対するファッション性、実用性に対する認識度等により被服行動に差異が生じていることを明らかにし、多角的な着装教育の重要性を提言している。

本報は児童・生徒がどのような着装意識をもっているかを、小・中学生による学年別、男女別、通学服種別に分析・検討することにより、その差異と特徴を解明し、児童・生徒の生活の一面を明らかにして小・中学生の心身ともに健康で快適な衣生活の方向を探ることにある。

## II 研究方法

調査対象は、愛媛県の中心地にある小学校(3校)と中学校(1校)の児童・生徒である。標準服通学と自由服通学の小学校、制服(標準服)を通学服としている中学校である。有効回答数886名で、その内訳は表1である。

調査方法は、質問紙により、担任教師の協力のもとに一斉に調査し、その場で回収した。

調査時期は平成9年9月～11月である。

調査内容は、被服価値を考慮し、小・中学生の発達段階を配慮して設定した。着装意識の質問項目は審美性に関するもの(2項目)、探求性(3)、自己主張(3)、同調性(2)、優越性

(1), 流行(1), 身体機能(2), 性役割意識(1), 所有欲(1), 購買行動(2), 実用性(2), イメージ(1), 興味・関心度(3), 対人調和性(4), 服の色(3)及び通学服に関するもの(7)の計38項目と生活意識に関する7項目である。

質問項目に対する回答は, そう思う, ややそう思う, あまりそう思わない, そう思わないの4段階尺度で得た。結果を単純集計, クロス集計するとともに,  $\chi^2$ 検定によって有意差を調べ検討した。

### Ⅲ 結果及び考察

#### 1. 調査対象者の属性

調査対象者の属性(家族数, 兄弟, 部活動状況)は表2となる。4~5人家族が全体の68%を占める。兄・姉がいる人は65%, 弟・妹がいる人は56%, きょうだいのいない人は8.5%である。部活動は, 全体的には約50%が体育系に属し, 約20%が文化系, 30%が参加していない状況である。中学生は体育系参加が多い。

#### 2. 生活に関する意識

小・中学生の現在の生活に関する意識は図1となる。全体としては, 「友達とおしゃべりすることは楽しい」と思っている児童・生徒が9割以上を占め, 次いで「学用品など自分のものを買うに行く」「部活や趣味に打ち込んでいる」者が8割, 「学校の勉強を一生懸命している」「学校生活は楽しいと思う」者が7割いる。「親のしつけは厳しいと思う」のは小学生46.1%, 中学生41.9%である。

小・中学生別にみると, 「学校の勉強を一生懸命している」「学校生活は楽しいと思う」「学用品など自分のものを買うに行く」のは, 小学

表1 調査対象者の内訳 (人)

学 年	通学服種	性 別		計
		男 子	女 子	
小学5年	標準服	52	49	101
	自由服	61	48	109
小学6年	標準服	54	47	101
	自由服	52	57	109
中学1年	制 服	118	130	248
中学2年	制 服	99	119	218
計		436	450	886

表2 調査対象者の属性 人 (%)

区 分	計			
	886(100)	小学生	中学生	
家 族 数 <sup>注1)</sup>	2 人	13( 1.5)	5( 1.2)	8( 1.7)
	3 人	60( 6.8)	25( 6.0)	35( 7.5)
	4 人	360(40.6)	147(35.0)	213(45.7)
	5 人	243(27.4)	91(21.7)	152(32.6)
	6 人	78( 8.8)	35( 8.3)	43( 9.2)
	7 人	29( 3.3)	14( 3.3)	15( 3.2)
	8人以上	6( 0.7)	6( 1.4)	
	無 回 答	97(10.9)	97(23.1)	
きょうだいの有無 <sup>注2)</sup>	兄	299(33.7)	133(31.7)	166(35.6)
	姉	277(31.3)	127(30.2)	150(32.2)
	弟	257(29.0)	111(26.4)	146(31.3)
	妹	239(27.0)	115(27.4)	124(26.6)
	な し	75( 8.5)	43(10.2)	32( 6.9)
部 活 動	体育系	434(49.0)	130(31.0)	304(65.2)
	文化系	161(18.2)	101(24.0)	60(12.9)
	参加していない	291(32.8)	189(45.5)	102(21.9)

注1) 家族数に調査対象者を含む

注2) 複数回答

生の方に多く、小学生から中学生にかけて、生活意識の変化が認められる。

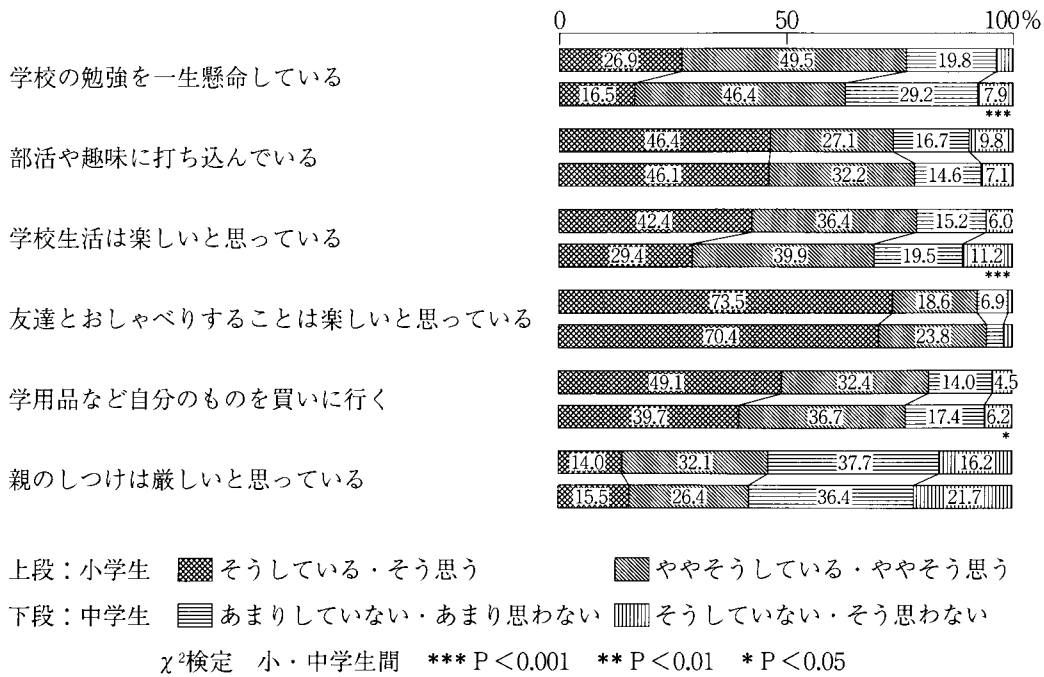


図1 生活意識 (小学生・中学生別)

### 3. 着装意識について

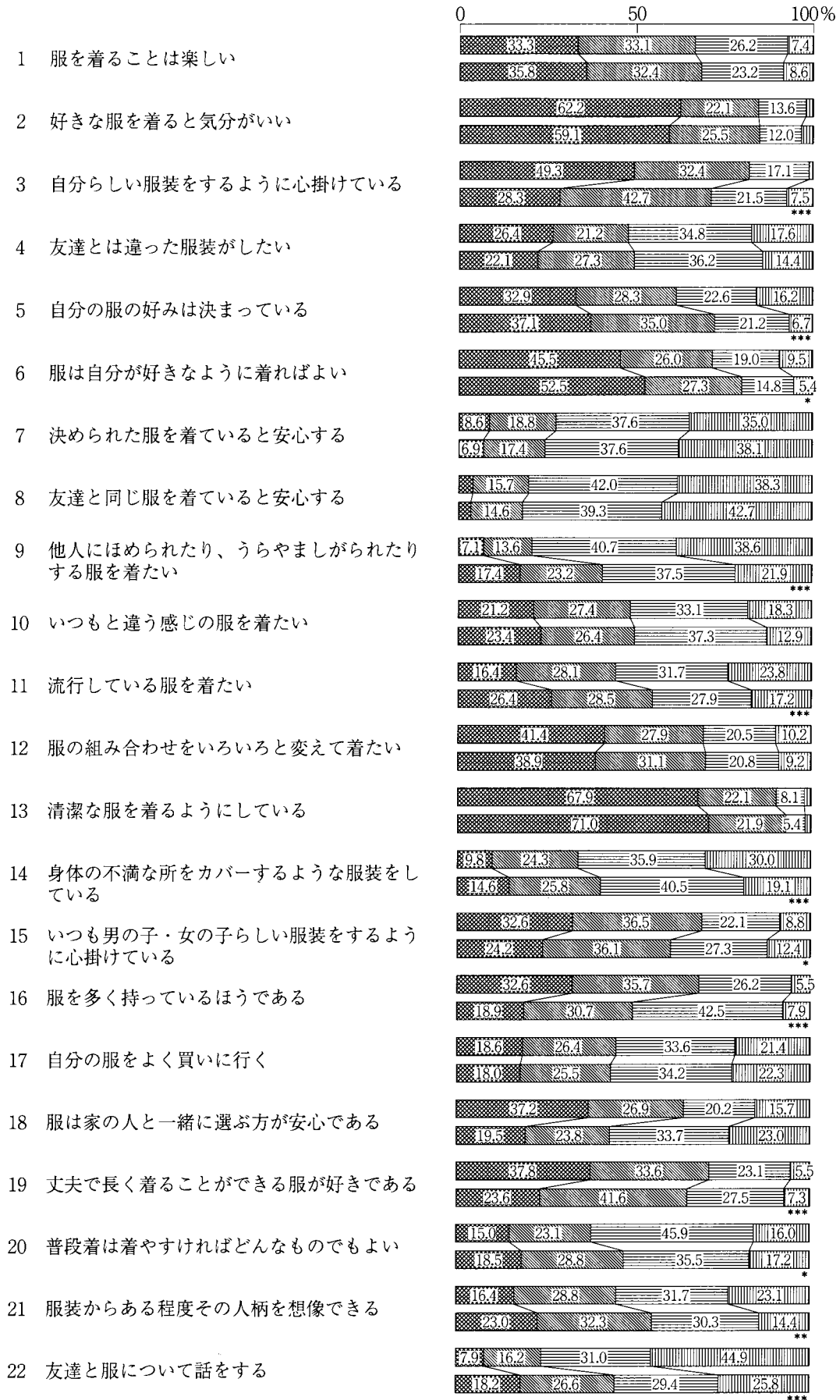
#### 1) 小学生・中学生別状況

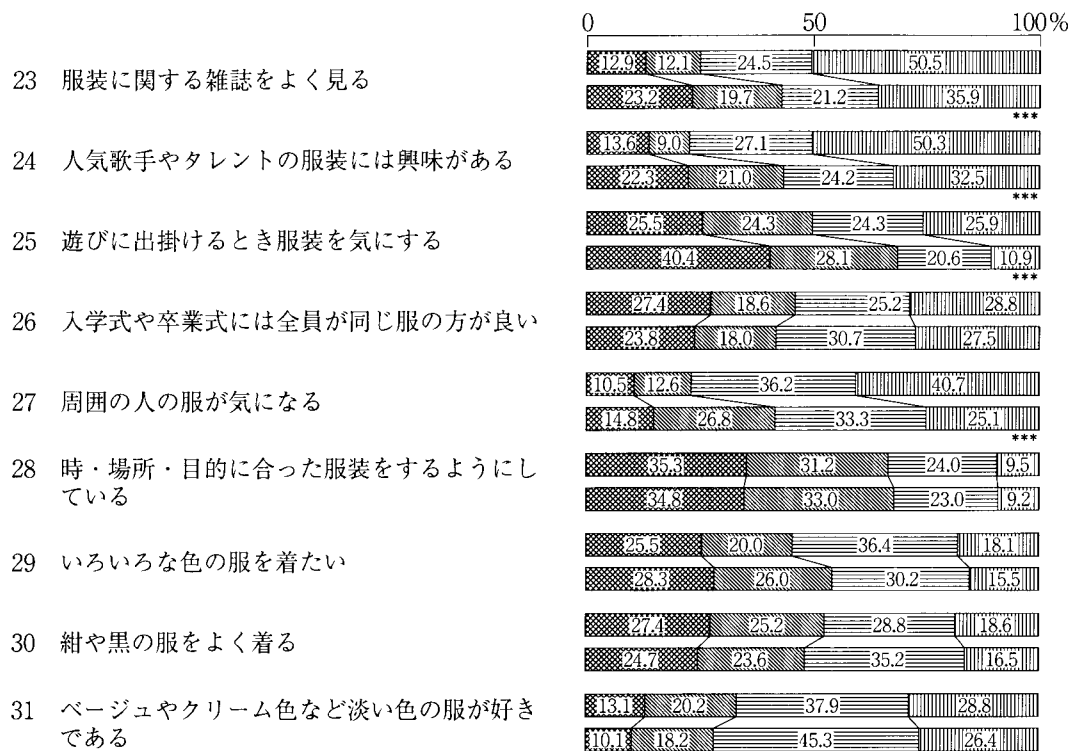
着装意識を小・中学生別に4段階でみると図2となる。小・中学生ともに意識が高いのは「清潔な服を着るようにしている」「好きな服を着ると気分がいい」「服は自分が好きなように着ればよい」「自分らしい服装をするように心掛けている」「自分の服の好みは決まっている」である。意識が低いのは「友達と同じ服を着ていると安心する」「決められた服を着ていると安心する」「他人にほめられたり、うらやましがられたりする服を着たい」「周囲のひとの服が気になる」「人気歌手やタレントの服装には興味がある」である。このことから、小・中学生は、着装の基本的とも言える衛生的な着方を重視しており、服は自分の好みに合った服を、自分らしく自由に着たいという意識が強く、決められた服を着たり、友達と同じ服装をすることは好んでいないといえる。

小・中学生間に、有意差が認められたのは17項目である。そのうち小学生の意識が高いのは、「自分らしい服装をするのが好き」「いつも男の子らしい・女の子らしい服装をするように心掛けている」「服を多くもっているほう」「服は親と選ぶ方が安心」「丈夫で長く着ることができる服が好き」であり、服に対する実用的な面が多い。性役割意識と服装のかかわりは全体的に高いものの、いつも男の子らしい・女の子らしい服装をするように心掛けているのは、小学生の方が高く、中学生は服装における性役割意識は縮小している。幅広く服装を楽しむ社会現象の影響をうけていると思われる。

中学生の意識が高いのは「自分の服の好みは決まっている」「服は自分が好きなように着ればよい」「他人にほめられたり、うらやましがられたりする服が好き」「流行している服が着たい」「服を着ることで身体の不満な所をカバーするようにしている」「普段着は着やすければど

小・中学生の服装に対する意識と行動





上段：小学生 ■ そうしている・そう思う ■ ややそうしている・ややそう思う  
 下段：中学生 ▨ あまりそうしていない・あまり思わない ▨ そうしていない・そう思わない  
 $\chi^2$ 検定 小・中学生間 \*\*\* P<0.001 \*\* P<0.01 \* P<0.05

図2 小学生・中学生別にみた着装意識

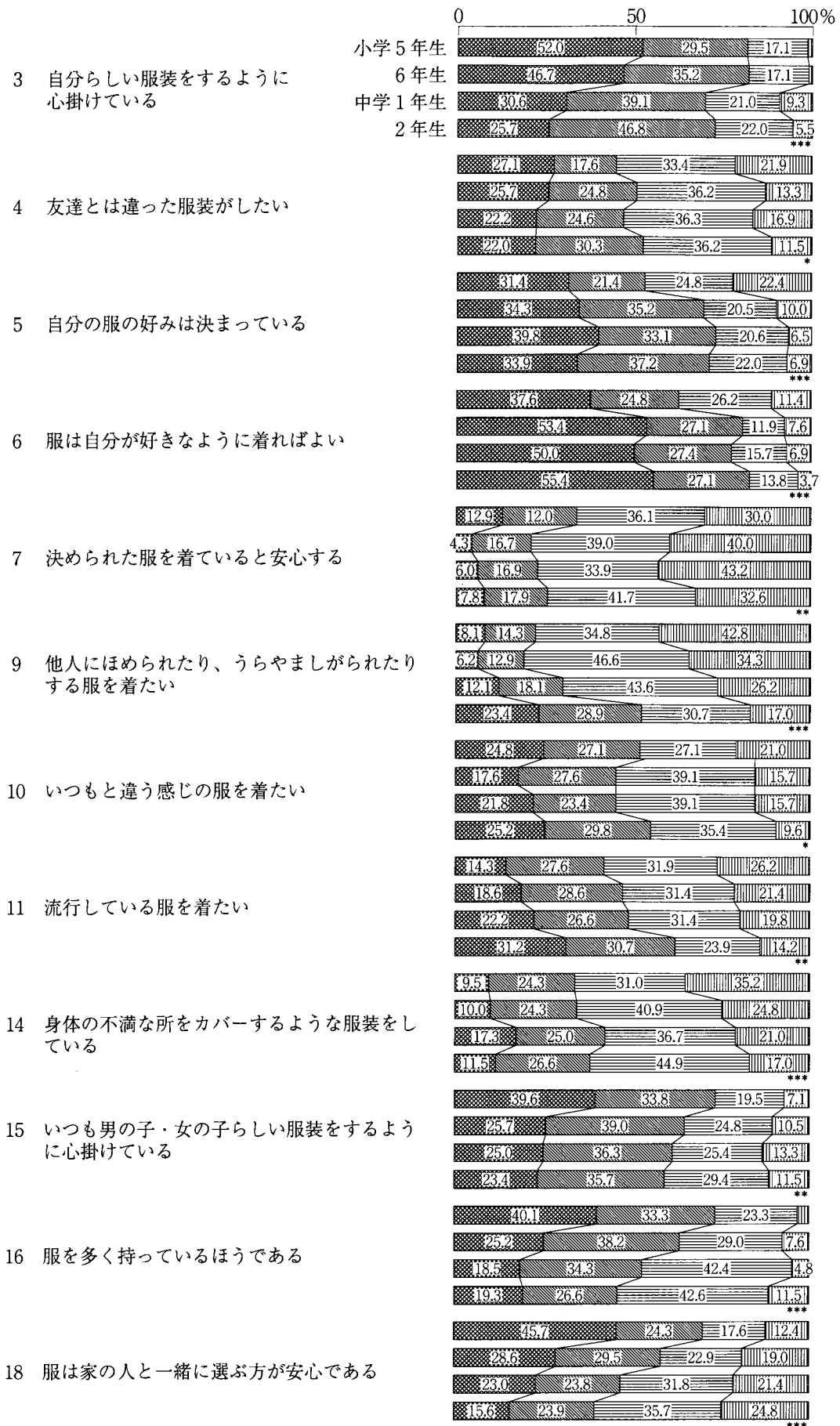
んなものでもよい」「服装からある程度その人柄を想像できる」「友達と服について話をする」「服装に関する雑誌をよく見る」「人気歌手やタレントの服装には関心がある」「遊びに出掛けるとき服装を気にする」「周囲の人の服が気になる」である。中学生になると、社会に対する興味・関心が強くなり、周囲の人や、周囲の目も意識するようになり、テレビや雑誌を情報源とし、それらから自分の好むものを吸収し、服装を通して自分というものを表現しようとする意識が高くなっていくことが明らかである。

## 2) 学年別状況

着装意識について、小学5・6年生、中学1・2年生別に分析すると22項目で有意差が認められた(図3)。

有意差が認められた項目のうち学年進行に伴い、意識が高くなるのは、「他人にほめられたり、うらやましがられたりする服を着たい」「流行している服を着たい」「身体の不満な所をカバーするような服装を心掛けている」「友達と服装について話をする」「服装に関する雑誌をよくみる」「人気歌手やタレントの服装には興味がある」「遊びにでかけるとき服装を気にする」「周囲の人の服が気になる」である。学年が上がるにつれ意識が低くなるのは「いつも男の子・女の子らしい服装をするように心掛けている」「服を多くもっている」「服は家の人と一緒に選ぶ方が安心」「丈夫で長く着ることが出来る服が好き」である。また5年生と6年生以降の状況に特異性がみられるのは「自分の服の好みは決まっている」「服は自分が好きなように着ればよい」「いつもと違う感じの服を着たい」である。

小・中学生の服装に対する意識と行動



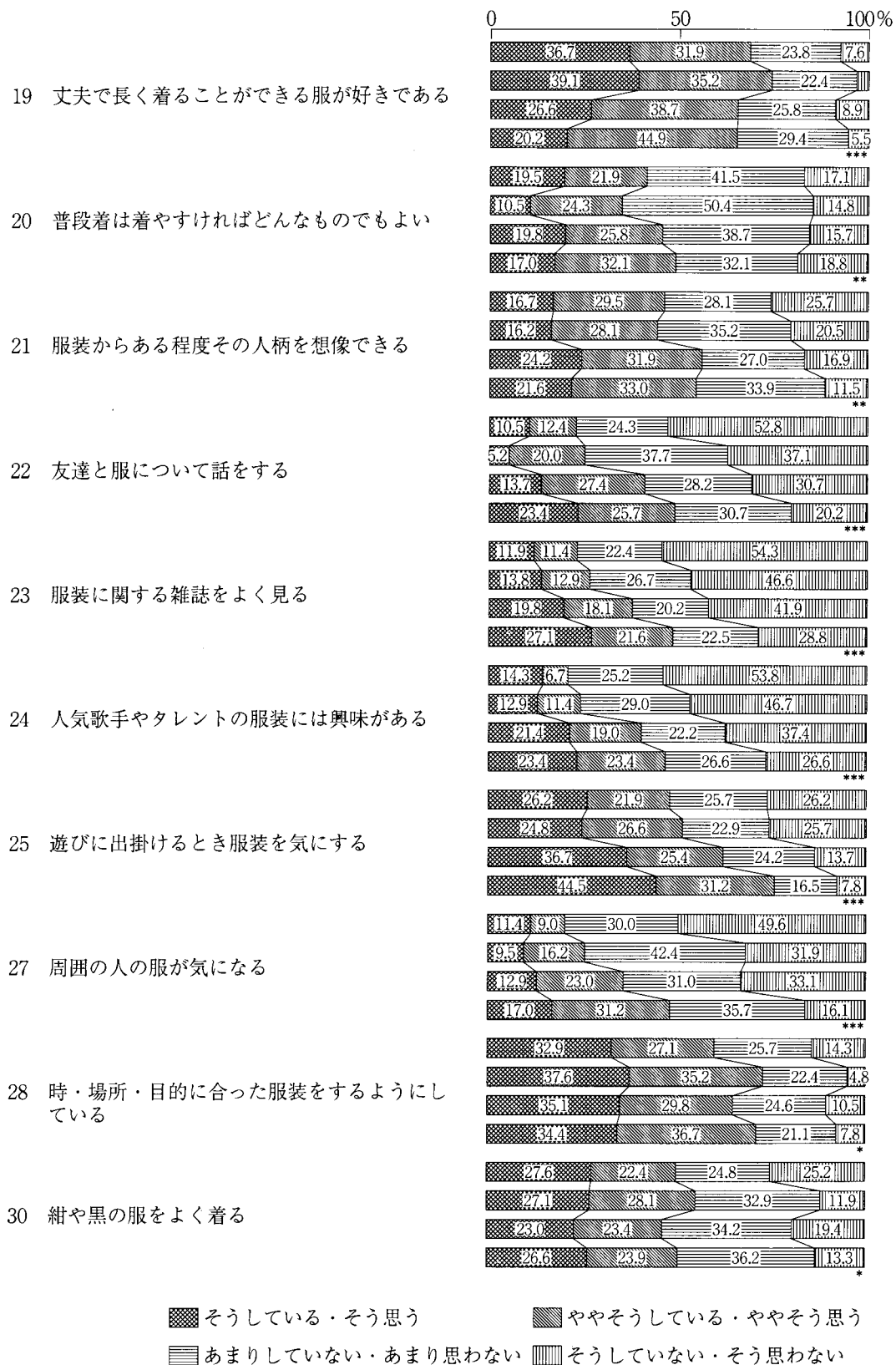


図3 学年別にみた着装意識



5年生では服を家の人と一緒に選んで安心したり、服を多く持っていると思う者が多く、衣服の選択や所持状況に関心が強く、男の子らしい・女の子らしい、自分らしい服装を心がけていることに特徴がある。

6年生では自分の服の好みが決まり、服は好きなように着ればよいと思う者がぐんと多くなる。服の組み合わせをいろいろ変えて着たいと思うようになり、着装に対して興味が増すものの、丈夫で長く着ることが出来る実用的な服を好んでおり、周囲の人への関心は薄いなど服装を通しての他者との関係には意識が低い。

中学1年生では、自分の服の好みが決まり、服は自分の好きなように着ればよいという気持ちは強く、遊びに出掛けるときの服装にも気を配るようになる。

中学2年生では、中学1年生の傾向がさらに強まり、自分の服装と周囲との関係を意識するようになる。「他人にほめられたり、うらやましがられたりする服を着たい」のは、小学5年(22.4%)から中学2年(52.3%)になり、「周囲の人の服が気になる」のは小学5年(20.4%)から中学2年(48.2%)に増加するなど、学年進行に伴い、服装に対する興味・関心が強くなり、流行や周囲への意識が高まる。また、自分の体型に対する意識が高まってきて、不満と感じている部分を衣服によって、カバーしようとするようになる。一方、男の子らしい・女の子らしい服装の意識は低くなり、幅広く着装を楽しみ、実用性のみならずファッション意識が高くなって、服装に対して、自己を他者に伝達する手段と意識するようになる。学年進行に伴い、服装を通して意識する環境が広がっていく。

### 3) 男女別状況

小・中学生別、男女別に分析すると、小学生男女間に25項目、中学生男女間に24項目の有意差が認められた(表3)。小学生と中学生ともに、有意差がみられた項目は22項目である。男女とも意識が高いのは、清潔な服装をするように心掛け、自分が好きな服を自由に着たいという意識であり、友達と同じ服装をするという対人調和の意識は低い。さらに男子は、実用的な服を好み、男の子らしさを意識した服装を心掛けており、周囲の服装に対しては意識が低い。女子は清潔で自分らしい服装を心掛けるとともに、服の組み合わせをいろいろと変えて着たいと思っており、服を着ることは楽しいと感じている意識が高く、着装を楽しんでいる。

ほとんどの項目で、女子の意識が高いなかであって、小・中学生とも男子の方が意識が高いのは「いつも男の子らしい(女の子らしい)服装をするように心掛けている」ことである。小学生では男子88.1%、女子46.2%、中学生では男子81.6%、女子42.5%が性別役割意識の服装を心掛けている。男子は男の子らしい服装を意識し、女子は女の子らしい服装にこだわる意識が低い。

現代社会において、男性と女性の区別が曖昧になり、かつての女性のみと考えられてきたアクセサリーや、化粧によるおしゃれも男性に受け入れられたり、女性もパンツルック、ジーンズ、Tシャツを着用し、ユニセックスファッションが多く見られるようになってきている。性別役割に関して、青年期において、男子は男性役割に価値をおきやすいのに対し、女子は女性役割を拒否し、両性を志向する傾向があるとされている。このような傾向が被服行動にも影響を与え、判断準拠の1つとなっていると考えられる<sup>8)</sup>。これら青年や成人における社会風潮が、小・中学生の意識にも反映していると思われる。

小学生の男女間のみ有意差が認められた項目のうち「普段着は着やすければどのようなものでもよい」は、男子は20.1%、女子は9.5%となり、小学生の男子と女子の普通着に対する

表3 2群間の $\chi^2$ 検定結果一覧 — 学年・男女別, 制服着用意識別, 着装の楽しさ別 —

項 目	学年・男女別		制服着用意識別		着装の楽しさ別		
	小学生 女-男	中学生 女-男	小学生 肯定-否定	中学生 肯定-否定	小学生 楽しい-そうでない	中学生 楽しい-そうでない	
1 服を着ることは楽しい	***	***	-**				
2 好きな服を着ると気分がいい	***	***	-***		***	***	
3 自分らしい服装をするように心掛けている	***	***	-***		***	***	
4 友達とは違った服装がしたい	**	*	-***		*	***	
5 自分の服の好みは決まっている	*	**			*	***	
6 服は自分が好きなように着ればよい		*	-***				
7 決められた服を着ていると安心する			***	***			
8 友達と同じ服を着ていると安心する			***	**	*		
9 他人にほめられたり, うらやましがられたりする服を着たい	**	***			***	***	
10 いつもと違う感じの服を着たい	**	***			***	***	
11 流行している服を着たい	**	***			***	***	
12 服の組み合わせをいろいろと変えて着たい	***	***			***	***	
13 清潔な服を着るようにしている	*	***				***	
14 身体の不満な所をカバーするような服装をしている		***				***	
15 いつも男の子・女の子らしい服装をするように心掛けている	-***	-***	*	*			
16 服を多くもっているほうである	**				***	***	
17 自分の服をよく買いに行く	***	***		**	***	***	
18 服は家の人と一緒に選ぶ方が安心である	***	***		*	***		
19 丈夫で長く着ることができると服が好きである				**			
20 普段着は気やすければどんなものでもよい	-**		**				
21 服装からある程度その人柄を想像できる	**	***	**		**	***	
22 友達と服について話をする	***	***			***	***	
23 服装に関する雑誌をよく見る	***	***			***	***	
24 人気歌手やタレントの服装には興味がある	***	***			***	***	
25 遊びに出掛ける時服装を気にする	***	***	*		***	***	
26 入学式や卒業式には全員が同じ服の方が良い			***	***			
27 周囲の人の服が気になる	***	***	**		***	***	
28 時・場所・目的に合った服装をするようにしている	***	***			**	***	
29 いろいろな色の服を着たい	***	***			***	***	
30 紺や黒の服をよく着る	**				*	*	
31 ベージュやクリーム色など淡い色の服が好きである	***	***		*	***	***	
制服に関する項目	制服を着ることは, 好きである	*		***	***		
	制服を着ることは当然である						
	制服を着ていると小, 中学生としての自覚を持つことができる			***	***		
	制服があると, みんなが同じ服装で安心できる	**		***	***		
	制服は自分らしさが表せないと思う			-***	-***	***	**
	制服については細かく決められているのでいやである		***	-***	-***	*	
制服は遊んだり勉強したりする時, 動きにくい			-**	-***			

— 男子優位を示す — は否定群優位を示す

$\chi^2$  検定 \*P<0.05 \*\*P<0.01 \*\*\*P<0.001

考え方の違いがあらわれている。また「紺や黒の服をよく着る」は女子の方が高い。

中学生の男女間のみ有意差が認められた2項目のうち、「服は自分の好きなように着ればよい」は、男女ともに意識は高いものの男子では49.6%、女子では55.0%がそう思っている。女子の方が、服は自由に着たいという意識が高く、成長するほど、男女の意識差は大きくなる。「身体の不満な所をカバーするような服装をしている」のは男子9.3%に対して、女子19.3%と有意であり、衣服のカバー性に関する意識は中学生で高まり、女子の方が高い。全体的に、中学生の方に男女間の差が大きく、成長に伴い、服装に対する意識の男女差が大きくなっていく。

#### 4. 制服（標準服）に関する意識

制服（標準服）に関する7項目については、中学生全員と、標準服を通学服としている小学生に尋ねた（図4）。意識が高いのは、「制服は遊んだり、勉強したりするとき動きにくい」「制服については細かく決められているのでいや」「制服は自分らしさが表せない」であり、制服に身体的・精神的束縛を感じている。着装意識として、服を自由に着たいという意識が高く現れているが、制服に対しても自由性を求める傾向が強く出ている。

小・中学生間で有意差の認められた2項目のうち「制服があるとみんなが同じで安心できる」とするのは小学生、「制服については細かく決められているのでいや」は、中学生が高い。中学生になると、制服に関する細かい規則が伴うことに対する否定意識が高まってくる。他項目には有意差は認められず、小・中学生間の制服に対する意識差は、比較的少ない。

先に、中学生の服装に関する意識を問うた<sup>7)</sup>際の制服に対する意識調査結果と比較してみると、本研究結果においては制服肯定意識が低くなり、制服の規則性や非活動性に対する否定意

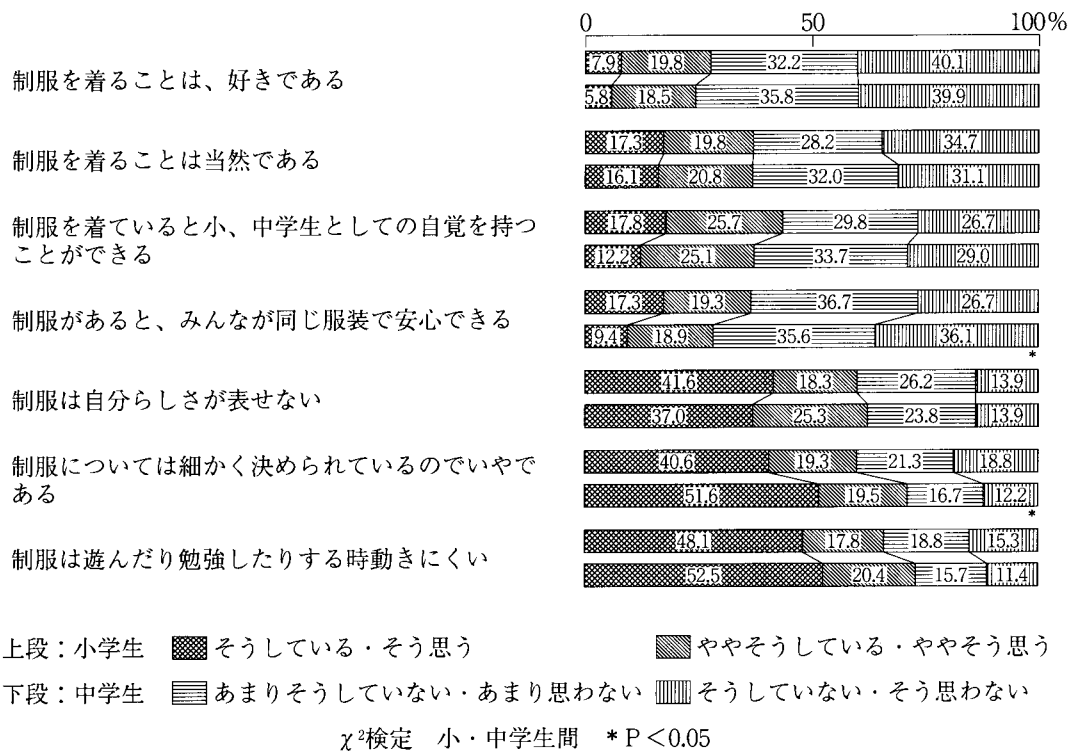


図4 制服（標準服）に関する意識（小学生・中学生別）

識が高くなっている。調査時期に5年間の時間差があり、この間に中学生の制服に対する意識が変化してきたと受け取れる。

制服に関する項目を学年別に分析すると図5となる。有意差が認められたうち「制服を着ることは好きである」「制服があるとみんなが同じで安心できる」は小学5年生と中学2年生で意識が高く、小学6年生と中学1年生が低いところに特徴がある。小学校から中学校へと環境が変化し、中学2年生では学校生活にも慣れ、落ち着いてくる時期の精神面とかかわっていると思われる。

制服に関する意識を、男女別に分析し、有意差の有無を示した(表3)。小学生の男女間では、制服(標準服)を着ることは好きで、みんなと同じで安心できるという意識が女子に高く、中学生では、細かく決められているのでいやであるという意識が女子に高い。他項目には、有意差は認められず、制服に関する男女間の意識差は比較的少ない。

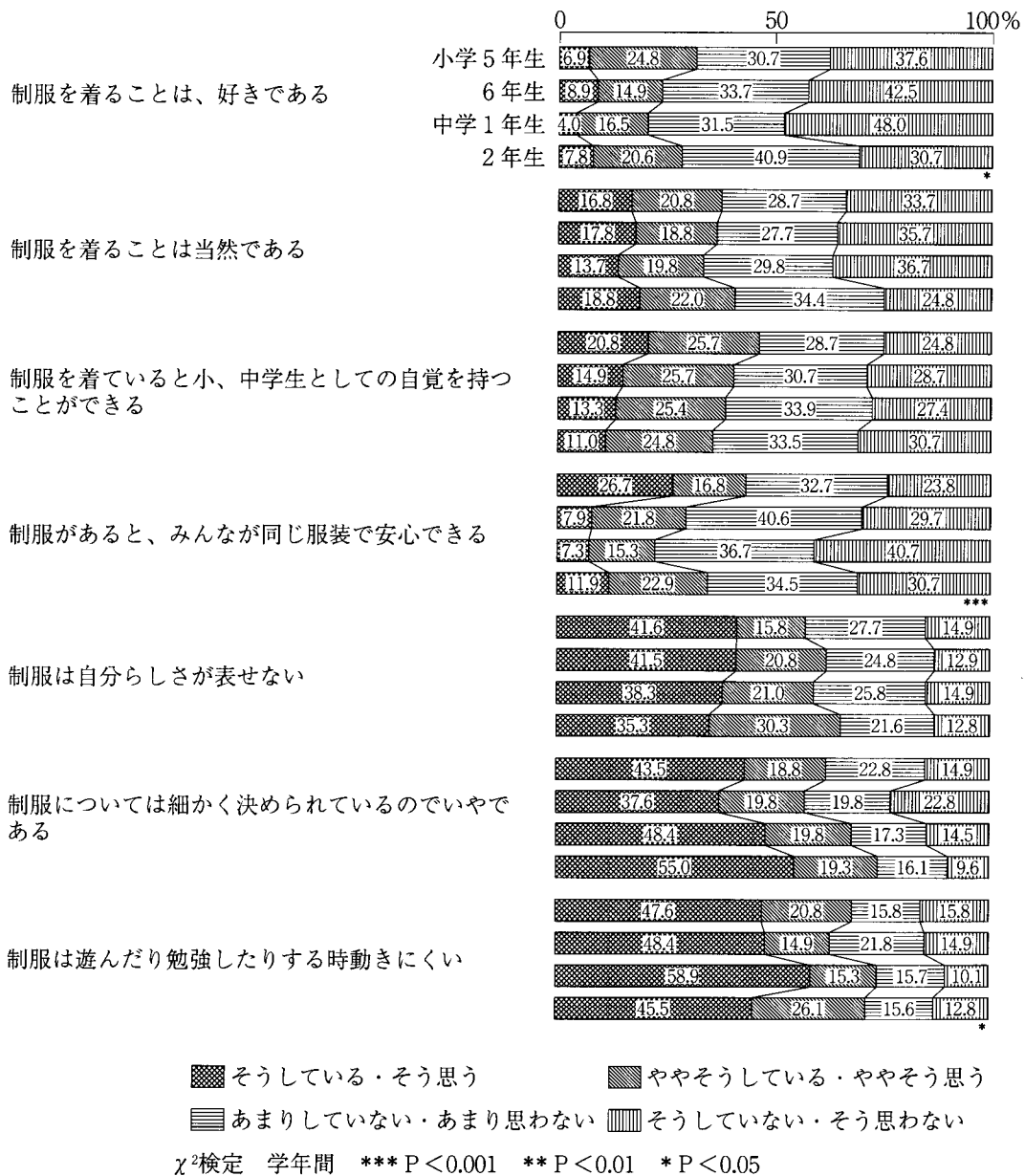


図5 制服(標準服)に関する意識(学年別)

## 5. 通学服種別にみた着装意識

### 1) 小学生の通学服種別比較

小学生の自由服通学と標準服通学別に着装意識を分析した結果、有意差が認められたのは7項目である(図6)。

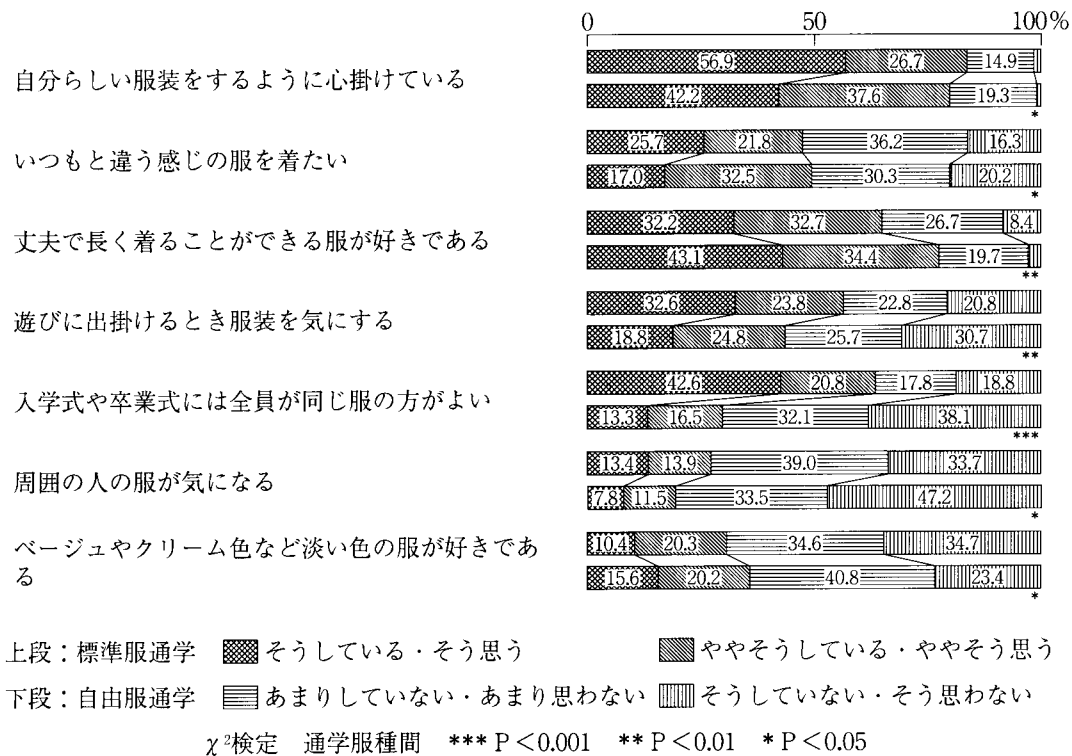


図6 小学生の通学服種別着装意識

標準服通学の児童の意識が高いのは、「自分らしい服装をするように心掛けている」「遊びに出掛けるとき服装を気にする」「入学式や卒業式には全員が同じ服装の方がよい」である。「入学式や卒業式には全員が同じ服の方がよい」とする意識差は大きく、標準服通学の児童(63.4%)に対し、自由服通学の児童(29.8%)と大差があり、体験による差が表れている。標準服通学の児童は、自分らしい服装をするようにしたり、出掛ける時の服装を気にするなど、私生活の服装に対する意識も自由服通学の児童より高く、儀式に対する服装にも強い関心を示している。

自由服通学の児童は、「丈夫で長く着ることができる服」「ベージュやクリーム色など淡い色の服が好き」の率が高く、服に対して実用性・経済性を求める傾向がある。

「いつもと違う感じの服を着たい」のは、自由服、標準服通学ともに約50%を占めるが、そう思うと強く意識しているのは標準服通学26%、自由服通学17%と差があり、標準服通学の児童の方が被服による変身願望が強い。

自由服通学の児童に「通学用に制服・標準服を着てみたいか」と問うたところ、そう思わない児童が75%を占め、自由服での生活にほぼ満足しているといえる。

### 2) 中学生の「小学校時代の通学服」別状況

調査対象中学生の小学校時代における通学服種は表4に示す通りである。制服(標準服)が183人(39.3%)、自由服が257人(55.1%)、標準服と自由服両方の経験がある生徒が26人(5.6

%) である。

小学校時代の通学服を制服(標準服)と自由服(自由服の経験を含む)の2群に分けて着衣意識を分析すると、有意差が認められたのは5項目である(図7)。「他人にほめられたり、うらやましがられたりする服を着たい」「入学式や卒業式には全員が同じ服の方が良い」「周囲の人の服が気になる」「制服を着ることは当然である」「制服があるとみんなが同じで安心する」であり、5項目全てにおいて制服(標準服)通学だった生徒の意識が高く現れている。制服(標準服)通学だった生徒は、出掛ける時には、場所や目的に合ったような服装をするように心掛けており、入学式や卒業式などの式典のときには同じ服の方がよいという意識が高く、周囲に対する関心が自由服経験の生徒より強い。制服に対しても肯定的に受け止めており、同調意識が高い。

表4 中学生の小学生時代における通学服種内訳

通学服種	人数	(%)
制服(標準服)	183人	(39.3)
自由服	257	(55.1)
標準服と自由服の両方	26	(5.6)
計	466	(100)

入学式や卒業式には全員が同じ服の方が良い」「周囲の人の服が気になる」「制服を着ることは当然である」「制服があるとみんなが同じで安心する」であり、5項目全てにおいて制服(標準服)通学だった生徒の意識が高く現れている。制服(標準服)通学だった生徒は、出掛ける時には、場所や目的に合ったような服装をするように心掛けており、入学式や卒業式などの式典のときには同じ服の方がよいという意識が高く、周囲に対する関心が自由服経験の生徒より強い。制服に対しても肯定的に受け止めており、同調意識が高い。

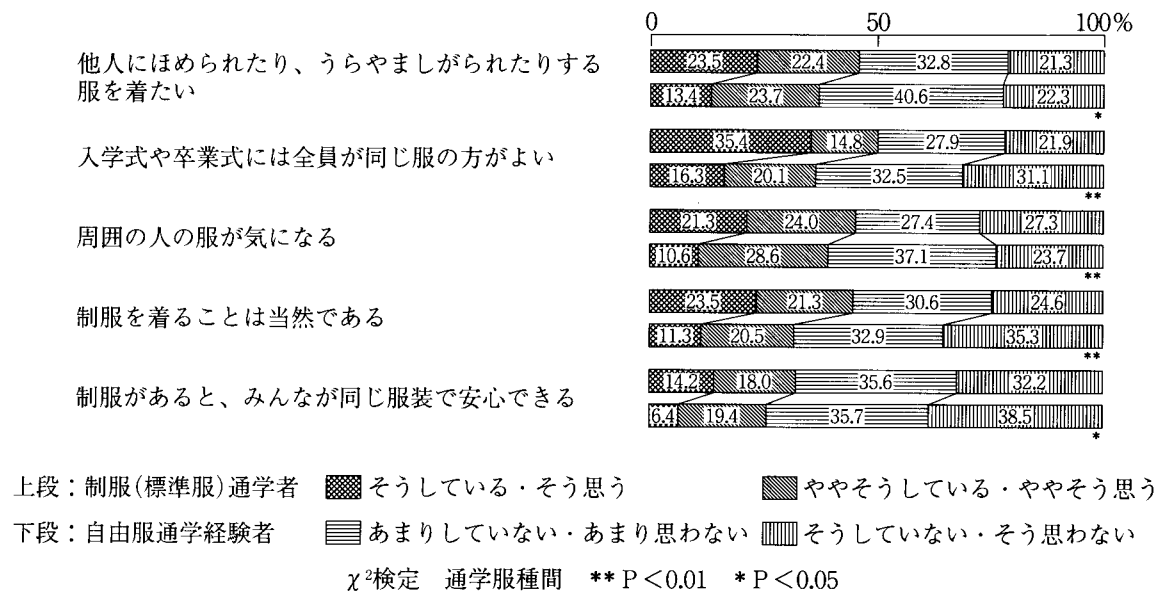


図7 「小学校時代の通学服」別にみた着衣意識(中学生)

### 3) 制服着用に対する肯定・否定意識別状況

「制服を着ることは当然である」(そう思う・ややそう思うを含む)と小学生の37.1%、中学生の36.7%が回答している。当然であると思わない(あまりそう思わない・そう思わないを含む)との2群間に、どのような着衣意識の差異があるかを検討した(表3)。

2群間に有意差が認められたのは小学生13項目、中学生8項目である。小・中学生共に有意差が認められ、制服を着ることは当然であるとする児童・生徒の方が意識が高いのは、「決められた服を着ていると安心する」「友達と同じ服を着ていると安心する」「いつも男の子・女の子らしい服装をするように心掛けている」「入学式や卒業式には全員が同じ服の方がよい」である。

制服着用を肯定的にとらえている児童・生徒は、入学式や卒業式には全員が同じ服の方がよいと強く感じており、決められた服やみんなが同じ服を着ていると安心するという同調など対人調和な面がみられ、性役割意識との関係も表れている。

さらに、小学生は「普段着は着やすければどんなものでもよい」「服装からある程度その人柄を想像できる」とし、普段着はどんなものでもよいといった実用性・経済性を重視している傾向がみられる。また、「服を着ることは楽しい」「好きな服を着ると気分がいい」「自分らしい服装をするように心掛けている」「友達とは違った服装がしたい」「服は自分が好きなように着ればよい」については、制服を否定的にとらえている人の意識が高いという特徴がでている。被服の実用性を認識し、探究的であり、被服によって自己主張する意識の高い小学生は制服を批判的にみる意識が高いといえる。

中学生は、小学生と共通意識のほかには制服を肯定的にとらえている生徒は「自分の服をよく買いに行く」「服は家の人と一緒に選ぶ方が安心」「丈夫で長く着ることが好きな服が好き」「ベージュやクリーム色など淡い色の服が好き」の項目に優位に有意差が表れ、自分の服の購入・選択に関心があり、丈夫で長く着る服が好きという堅実さ、経済性を重視する傾向が認められる。

制服に関する項目には、2群間に全て有意差が認められる。制服着用を肯定する児童・生徒は「制服を着ることは好き」「制服を着ていると小・中学生としての自覚をもつことができる」「制服があるとみんなが同じ服装で安心」と強く感じており、制服の着用による自覚も高い。

一方、制服着用に否定的な児童・生徒は「制服は自分らしさが表せない」「制服については細かく決められているのでいや」「制服は遊んだり勉強したりするとき動きにくい」と、制服に対する否定意識が強く、自由性や機能性においても窮屈だと感じている。

表5 生活意識に関する2群間の有意差

項 目	制服着用意識別		着装の楽しさ別	
	小学生 肯定-否定	中学生 肯定-否定	小学生 楽しい-そうでない	中学生 楽しい-そうでない
学校の勉強を一生懸命している		***		*
部活や趣味に打ち込んでいる		*		
学校生活は楽しいと思っている	*		**	**
友達とおしゃべりすることは楽しい			***	***
学用品など自分のものを買うに行く				***
親のしつけは厳しいと思っている			-*	*

$\chi^2$  検定 \*\*\* P < 0.001 \*\* P < 0.01 \* P < 0.05

-は否定群優位を示す

生活に関する意識とのクロス集計した結果は表5のように中学生は「学校の勉強を一生懸命している」「趣味や部活にうちこんでいる」、小学生は「学校生活は楽しいと思っている」において有意差が認められた。通学服としての制服（標準服）を肯定的に受け止めている児童・生徒は、学校生活も楽しく充実していると感じている率が高い。

## 6. 「着装の楽しさ」の要因

「服を着ることは楽しい」と小学生の66.4%、中学生68.2%の者が意識している。服を着る楽しさの意識を左右する項目や強くかかわっている条件を明らかにするため服を着ることは楽しい（そう思う・ややそう思う）群と楽しいと思わない（あまりそう思わない・そう思わない）の2群に分け、分析を行った（表3）。

有意差の認められたのは、小学生24項目、中学生23項目である。服を着ることは楽しいと思っている児童・生徒は、好きな服を自分らしく着たいと思っており、流行している服やいつもと違う感じの服など幅広いジャンルの服を楽しみたいと思っている。また、友達と服装についての話をしたり、雑誌やテレビなどから情報を得るなど服装に関する興味・関心が高く、情報交換を積極的に行っている。出掛ける際には、T・P・Oに応じた服装を意識し、周囲との調和も大切にしており、普段着においても注意を払い、実用性だけでなくファッション性も求めている。衣服の色に関しても関心が高く、着装に関する様々なことに興味をもち、積極的である。

制服に関しては、自分らしさが表せないと、束縛感をより強く感じている。

生活に関する意識と「服を着ることは楽しい」との関連を分析すると有意差が認められたのは小学生3項目、中学生5項目である(表4)。「学校の勉強を一生懸命している」「学校生活は楽しい」「友達とおしゃべりすることは楽しい」「学用品など自分のものを買うに行く」において、服を着ることは楽しいと感じている児童・生徒の方の意識が高い。着装の楽しさを強く認識できている児童・生徒の方が、学校生活に対する適応も高いといえる。

### 7. 着装の自由性を求める意識と制服着用意識との関連

「服は好きなように着ればよい」と「制服着用は当然である」の反応をクロス集計し、

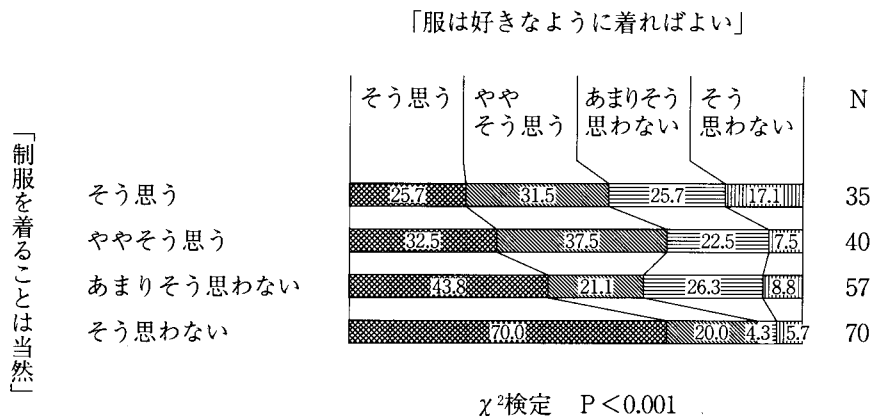


図8 「服は好きなように着ればよい」・「制服着用は当然」のクロス集計結果(小学生)

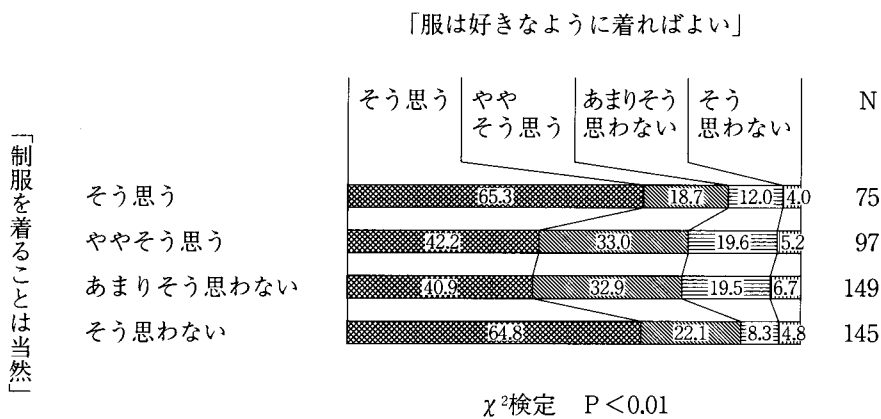


図9 「服は好きなように着ればよい」・「制服着用は当然」のクロス集計結果(中学生)



服装の自由性・自己主張と制服着用による服装規範との関係を標準服着用の小学生と全中学生別に探ってみると図8, 9となる。

小学生は、「服は好きなように着ればよい」と思う者ほど制服（標準服）否定意識が強い。服装の自由性を求める意識は制服を批判的にみる意識を強めているといえる。

中学生の「服は好きなように着ればよい」と思う者は、制服着用を強く肯定する者と強く否定する者に多い。服は自由に着たいし、制服着用は当然と思わないとする小学生と同様の意識と服は自由に着たいが、制服を着用するのは当然と思う服装の多面性を受け入れている考え方があらわれている。

個としての自分から学校や社会の中の自分へと認識を広げていく過程における、服装意識の変化の一面と考えられる。服装の自由性と制服着用による社会規範の関連に、小・中学生においてこのような差異があることが明らかとなった。

## Ⅳ 要 約

小・中学生の、服装に対する意識と行動を明らかにし、心身共に健康な衣生活をおくる服装教育の資料を得るために、小学生・中学生男女886名を対象に調査を行った。結果は次の通りである。

1. 小・中学生ともに、清潔な服、自分の好みに合った服を自分らしく自由に着たいという意識が強く、決められた服を着たり、友達と同じ服装をすることは好んでいない。

2. 小学生は、服に対する実用的意識が高く、中学生は周囲の人や目を意識するようになり、服装を通して自己表現しようとする意識が高くなる。

3. 学年別特徴をみると、小学5年生では、服に関する情報交換することは少なく、6年生になると服装に対する興味が増し、中学1年生では自分の服の好みが決まり、服を着ることは楽しいと感じ、2年生では時・場所・目的に応じた装いも意識するようになる。

4. 学年の進行に伴い、服装による性役割や実用性の意識が低くなり、服装に対する興味・関心が強くなり、流行や周囲への関心、服装の楽しさの意識が高まり、服装を通して意識する環境が広がっていく。

5. 全体的に女子の方が服装意識は高い。男子は実用的な服を好み、男の子らしさを意識した服装を心掛け、周囲に対する関心は低い。女子は組み合わせをいろいろと変えて着たいなど服を着ることは楽しいと感じており、周囲に対する関心も高い。成長するに従って服装意識の男女差は大きくなっていく。

6. 性役割意識の服装を心掛けているのは、小学生では男子88.1%、女子46.2%、中学生では男子81.6%、女子42.5%である。男子は男の子らしい服装を意識し、女子は女の子らしい服装にこだわる意識が低い。

7. 制服（標準服）に対する小・中学生間における意識差は少ないが、小学生は制服があるとみんなが同じで安心し、中学生は細かい規則があるのでいやであるという点で有意差が認められる。

8. 制服（標準服）に関する意識の性差は比較的少ないものの、小学生では制服を着ることは好きでみんなが同じで安心できるという意識、中学生では細かく決められていやであるという意識において、いずれも女子の方が高い。

9. 自由服通学児童は、丈夫で長く着ることが出来る服を好み、服の色に関する意識も高く、実用性、経済性を求める傾向がある。標準服通学児童は、自分らしい服装を心掛け、出掛ける時の服装にも注意を払い、儀式に対する服装にも強い関心を示す。

10. 小学校時代に標準服通学だった中学生徒と自由服通学経験者間では、標準服通学だった生徒の方が、周囲に対する関心や式典にはみんなが同じ服装の方がよいという伝統重視意識が高く、制服に関しても、肯定的に受け止めている。

11. 制服着用を肯定的に思う児童・生徒は、同調的価値観や実用的価値観にウェイトがおかれ、学校生活も楽しく充実していると感じている率が高い。否定的な児童・生徒は自由性や変化に対する価値観にウェイトがおかれている。

12. 着装の楽しさを強く意識している児童・生徒は、自分らしい服装や流行している服装、いつもと違う感じの服装を楽しみたいという多様な服種の着用意識が高く、友人との交流や周囲への調和を図っており、普段着においても注意を払い、実用性だけでなくファッション性も求めている。色に対する関心も高く、着装に関する様々なことに関心をもち積極的である。日常生活や学校生活においても積極的に楽しんでいる。制服に対しては、自分らしさが表せず、規則の窮屈感を感じている。

13. 小学生において、着装の自由性を求める意識は制服（標準服）を批判的にみる意識を強めている。中学生の服装の自由性を強く意識する者は、制服着用を強く肯定する者と強く否定する者に多い。着装の自由性・自己主張と制服着用による服装規範の関係に小・中学生の差異が認められる。

このように、小・中学生の服装については、着用者側からの意識状況が明らかとなった。学年・男女で意識の差異がみられ、学年が進行するとともに意識する環境が広がっていく。興味・関心の広がりや着装意識を通して明確に示された。

着装を心理的に楽しむことができる児童・生徒は自分自身や、周囲の着装に対しても関心が高く、友人との交流や周囲への調和を図っており、着装を通して、自己を表現するとともに、周囲との調和も大切にしながら生活している。心地よい着装は人間形成に大きな影響を及ぼしていることが明らかとなった。小・中学生が1日の大半を過ごす学校における通学服による影響も重要である。制服（標準服）通学では、伝統や対人調和的被服価値を重視し、自由服通学では、自由性や探求的被服価値を重視する傾向がみられ、通学服の経験が着装意識に影響を及ぼしていることが分かった。制服（標準服）通学の児童・生徒のうち、制服を肯定的に受け止めている者は、学校生活においても適応している傾向がみられる。折りしも、米国の教育界において、小・中学校の制服を復活させている動きが報告されている。「制服を着ると子どもたちも気持ちが変わる。校内の規律が守られるようになった」と述べているのは、ニューヨーク、ブロンクス地区第71公立校の校長先生である<sup>9)</sup>。本研究において、制服（標準服）、自由服それぞれに児童・生徒を育てることが具体的に明らかとなった。制服通学者に対しては、機能性やファッション性の点においても児童・生徒、教師や保護者が一緒に話し合い理解するとともに、私服に対する着装の意識が高まるような配慮を、自由服通学者には、T・P・Oを配慮した服装や、周囲との調和、伝統的文化の良さや大切さを伝えていく指導を進めることにより、着装の楽しさ意識をさらに高めることができる。制服（標準服）・自由服通学者ともに、経験で培われる着装意識の良さや特徴を生かし、より充実した衣生活が送れるようになることを考える。

衣服は「第2の皮膚」といわれるほど私たちが生きていくうえでは欠かせないものであるが、

本研究を通して、被服と心の相互作用の強さに改めて驚かされた。服装を通して、児童・生徒は生活を表現している。着装の楽しさは多様な着装体験により深まるのであるが、さらに、人間形成にも好影響を及ぼしていることが明らかである。小・中学生の66～68%は「服を着ることは楽しい」と感じているので、着装教育の充実によって、さらに小・中学生の着装に対する意識を高め、日々の生活が、より生き生きとしたものとなっていくことを期待したい。

終わりに、本調査にご協力くださいました小・中学校の先生方、児童・生徒の皆様に深く感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 神山進 衣服と装身の心理学 33～35 関西衣生活研究会 (1992)
- 2) 日本毛織物株式会社 公立中学校標準服について 1～29 (1997)
- 3) 鮎田崎子 小・中学生の通学服に関する調査研究—愛媛県における実態と教師の意識 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第41巻 第1号 137～151 (1994)
- 4) 新村出編 広辞苑第三版 岩波書店 1331, 2051 (1983)
- 5) 鮎田崎子 愛媛県における小学生の被服の着用に関する意識と行動 (第1報) —日常着の着方について— 日本家庭科教育学会誌 第36巻 第3号 27～33 (1993)
- 6) 鮎田崎子 愛媛県における小学生の被服の着用に関する意識と行動 (第2報) —着装心理と着装体験からの検討— 日本家庭科教育学会誌 第36巻 第3号 35～41 (1993)
- 7) 鮎田崎子 愛媛県における中学生の服装に対する意識と行動—被服の購入・着装・手入れ・廃棄のかかわり—愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第44巻 第2号 203～220 (1998)
- 8) 中島義明他 被服行動の心理学 朝倉書店 168 (1996)
- 9) 朝日新聞社 AERA No.14 4月6日号 45～46 (1998)